

第44回 日本救急医学会総会・学術集会 実施 「救急医 1,000人アンケート」考察 学会長の立場から

横田 裕行*
Hiroyuki Yokota

はじめに

この度、私は「第44回日本救急医学会総会・学術集会」を会長としてお世話させていただきました。今回の総会・学術集会は、救急医療、そして現場で活躍している救急医がどのような課題を抱え、そして将来に向けてどのような方向で進んでいけばよいのかを参加者全員で議論する場を提供するものと考え、「挑戦」というテーマを掲げさせていただき、さまざまな内容の企画を行って、多くの救急医に参加をいただきました。そのようななか、本誌を編集・発行している株式会社へるす出版とパネルディスカッション「地域医療と救命救急センター」を共催し、堤晴彦先生（埼玉医科大学総合医療センター）と太田祥一先生（親樹会恵泉クリニック/東京医科大学救急・災害医学分野）の座長のもとに活発で内容のある議論がなされました。その内容は、今号の後半に論文化して掲載されておりますので、ぜひお読みになっていただきたいと思っています。また、同社が企画した「救急医 1,000人アンケート」を学会会場でを行い、参加者の任意の判断で回答をいただきました。その集計結果の速報は本誌2017年1月号（第41巻第1号）において、編集委員であ

る松嶋麻子先生（名古屋市立大学）による簡潔なコメントとともに紹介されており、読者の皆様もご覧になったかと思います。

これらを踏まえ、本稿では「第44回日本救急医学会総会・学術集会」の会長として「救急医 1,000人アンケート」を拝見し、現時点で救急医が直面している現状やさまざまな課題がどのようなものであるか、私見を交えて記載させていただきました。

第44回日本救急医学会総会・学術集会と本アンケート調査の意義

「第44回日本救急医学会総会・学術集会」は2016年11月17日～19日に JR 品川駅に近接するグランドプリンスホテル新高輪で開催されました。わが国では、少子高齢化のなかで社会が救急医療に求めるニーズが大きく変容し、かつ多様になっています。当然、社会から救急医に求められる内容も大きく変化していると思われます。例えば、従来は多発外傷、広範囲熱傷、あるいは急性薬物中毒などの外因性救急疾患を中心とした初療室や集中治療室、手術室での迅速で適切な対応や知識が救急医には求められてきました。しかし社会の変化とともに、現在は多疾患を有する高齢者内因性救急疾患への対応、

* 第44回日本救急医学会総会・学術集会会長/日本医科大学大学院医学研究科救急医学分野教授/同付属病院高度救命救急センター長

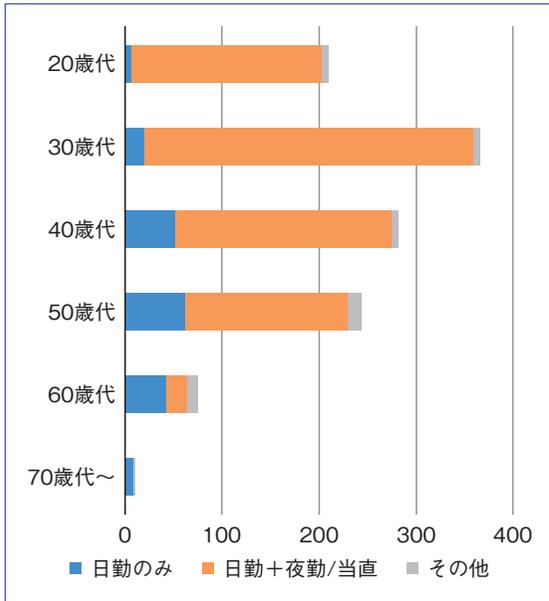


図2 勤務形態 (男女混合)

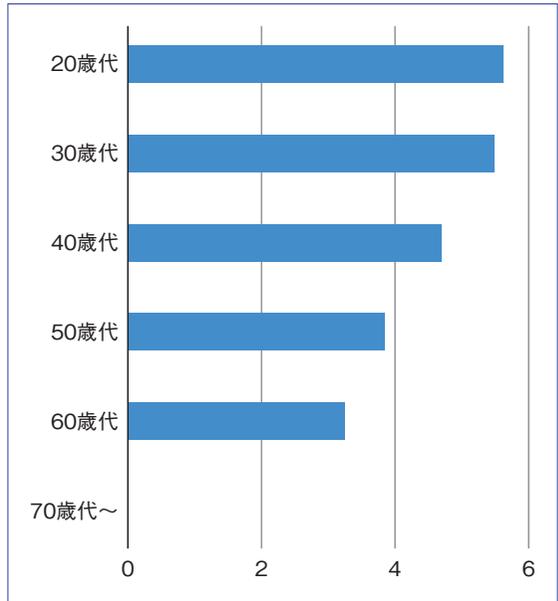


図3 一月当たりの平均夜勤/当直回数 (男女混合)

前の設問の結果、すなわち30歳代の育児に係る世代の女性医師で三次救急施設の勤務割合が高いことと合わせて考えると、興味深い結果であった。

3. 一月当たりの平均夜勤/当直回数 (図3)

一カ月当たりの平均夜勤/当直回数は20歳代と30歳代で5回以上、60歳代でも3回を超えるという結果であった。平均的には週に1回夜勤/当直にあたるような数字であるが、実際は当直明けも通常の勤務を行っているのが現状と考える。人の生命を預かる職業である以上、一定以上の勤務時間を強いられることはやむを得ないと考えるが、日常化すると以下の設問にあるように仕事のキツさやモチベーションの低下に直結するので、救急医学会全体の喫緊の課題であると認識している。ちなみに、「10回/月以上の夜勤/当直がある」と回答したのは27名で、最多回数は15回(3名)であった。

4. 仕事のキツさについて (図4)

年代にもよるが、男女とも一定の割合で「超キツイ」「キツイ」が存在している。とくに男

性の40歳代、50歳代ではほぼ半数、あるいはそれ以上の割合、女性では20歳代、30歳代に目立っている。もちろん、仕事のキツさは勤務時間や拘束時間だけではなく個人のモチベーションや職場の人間関係に大きく左右される部分である。しかし、前の質問で「10回/月以上の夜勤/当直がある」と回答した27名について、この設問の回答をみると、超キツイ：4、キツイ：20、丁度よい：3という結果であり、救急医の勤務環境の早急な改善を行わなければならない結果と考える。

5. 仕事がキツくても続ける理由 (図5)

前の設問で「超キツイ」「キツイ」と選択した回答者を対象にしたものであるが、男女とも「救急ならではの病態やその急変対応に醍醐味を感じる」という回答が多かった。特徴的なことは、男性医師では各年代とも使命感をもって仕事をしている割合が一定以上存在する一方で、女性医師ではむしろ達成感や救急の醍醐味を理由に仕事を継続している点である。

ちなみに、三次救急施設勤務者では使命感：147、達成感：111など救命に直結する回答が

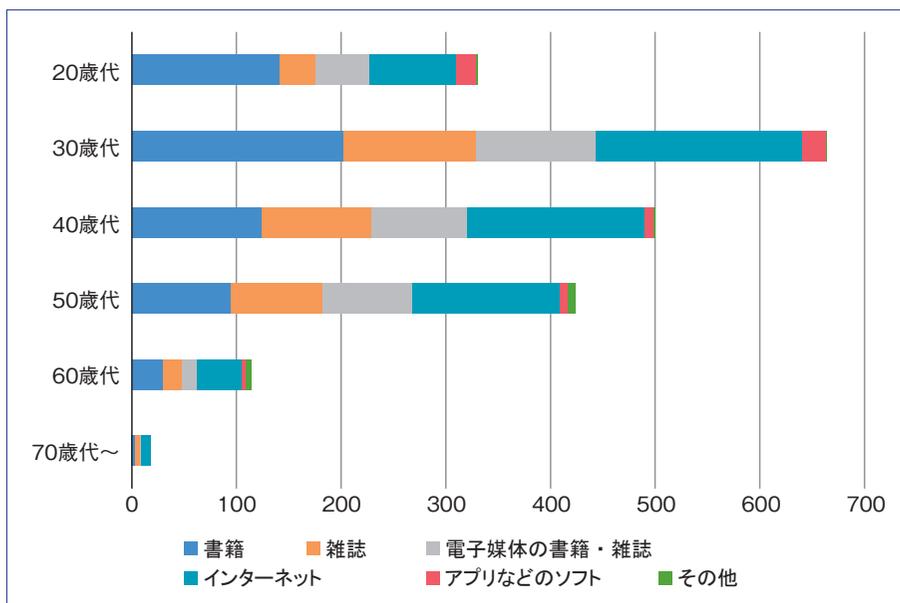


図13 勉強するときによく参考にするもの (男女混合, 複数回答)

急医療においてはただちに解決できる課題ではない。短期的に行うことができる対策としては、個々の医療施設での努力に負うところが大きいであるが、国家的な規模として中長期的な根本的対策を講じなければならないであろう。

13. 勉強するときによく参考にするもの

(図13)

各年代で「書籍」「インターネット」の割合が高くなっている。しかし、幼少時からインターネットに慣れ親しんでいるはずの20~30歳代よりも、50~60歳代のほうが「インターネット」の回答割合が高いことは興味深い。また、インターネットに情報が溢れている現在であっても「書籍」の回答が多いこと、しかも20歳代でとくに多くなっていることは、学術的な情報収集のツールとしての「書籍」の信頼性が若い世代にも浸透していることを裏づけている。一方で、「雑誌」や「電子媒体の書籍・雑誌」の回答割合が各年代で低いことには、これらの媒体における情報発信能力の問題なのか、信頼性の問題なのか、興味のあるところである。

まとめ

今回のアンケート結果は「第44回日本救急医学会総会・学術集会」に参加した救急医のなかで、自身の任意の判断で調査に協力し、その回答結果を集計したものです。したがって、さまざまなバイアスは存在するものの、学会参加者約5,800人のなかで約1/4に当たる1,201人(有効回答1,187人、一人当たり1回のアンケート回答と判断)の意見を集約したものと考えます。そのような意味で、現時点で救急現場において活躍している救急医の実態を示した結果とすることができます。

そのようななかから、やはり救急医が不足していることが根本原因である当直回数の問題やスタッフ確保の課題が、改めて明らかとなりました。また、若い女性救急医が増えていくなかで職場環境の整備、具体的には育児や研修・研究体制の支援、ダブルボード取得のための支援などを行う重要性も指摘されました。個々の医療施設で解決可能なもの、学会の支援が必要なもの、国レベルでの議論が必要な問題など、そ